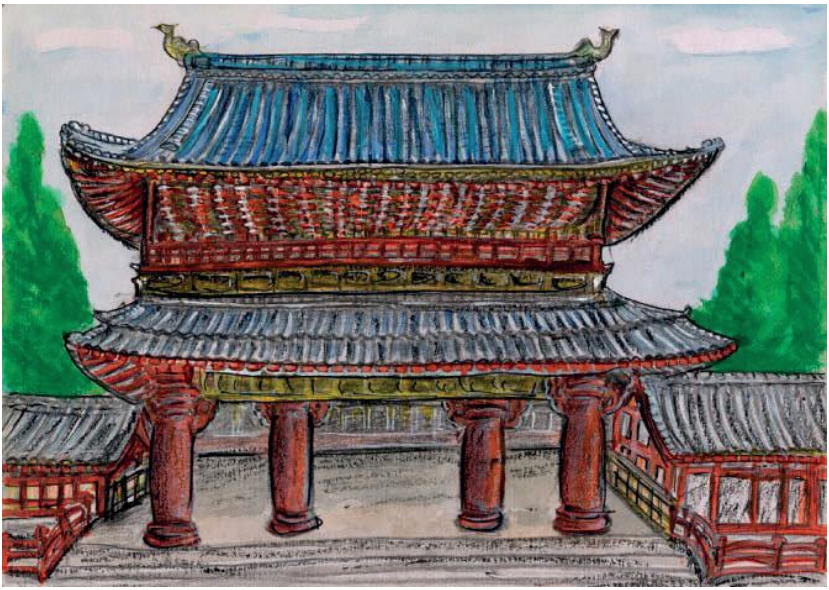
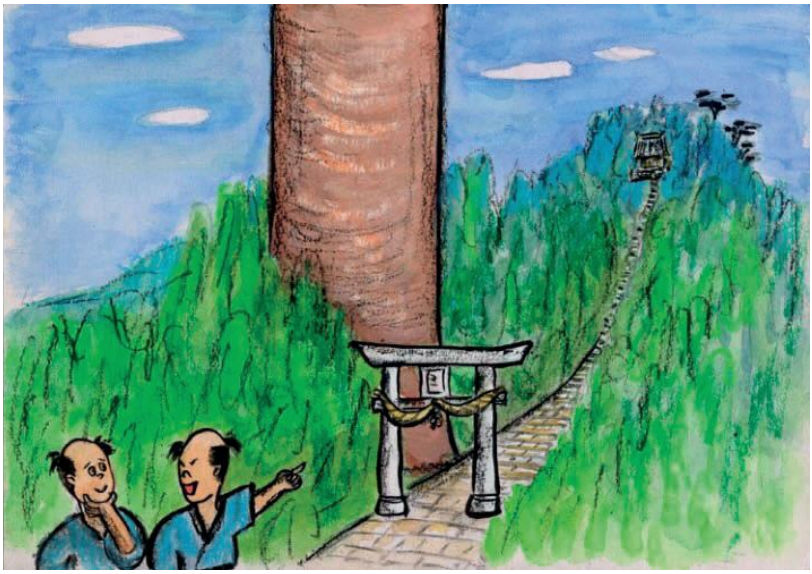
むかし、むかし、京都の東本願寺（ひがしほんがんじ）という大きなお寺で、山門を作ることになった。

大きな大きな山門を作るのだから、大きな
大きなケヤキの木がたくさん要ったそうな。





鍋谷村のお宮さんには、大人が五人、両手を広げて、やっと木のまわりをまわるほどの大きなケヤキの木があった。

「お宮さんにゃ、大きなケヤキがあるが、あの木を、山門に使ったらどうやろ」

「そうやなぁ、あれなら、本願寺さんの門にぴったりや」

そう話し合って木を切ることにした。

そこでまず、鍋谷一、力自慢の男が、「わしゃ、一人で切ってみせる」と、切りはじめた。

顔を真っ赤にしながら、汗をいっぱい流してがんばったが、それでも木の半分も切れん。

そこへ、二番目に力自慢の男が来て、「わしも手伝う」と言い、こんどは、二人がかりで切ったが、それでも木は、グラリともせん。

いつの間にか、腰の曲がった年寄りから小さな男の子まで、村中の男という男が木を切る手伝いをしはじめた。

すると、どうだろう。すこしづつ、すこしづつ木が傾きはじめた。

どのくらい時間がたったのか、あたりが暗くなったころ、ようやく、ドーンという大きな音とともに、ケヤキの木が倒れた。

村の人たちが、倒れた木の切り株のところに、ぞろぞろ、ぞろぞろと集まってきて、

「さーて、どうやって、京都まで運ぶかの」

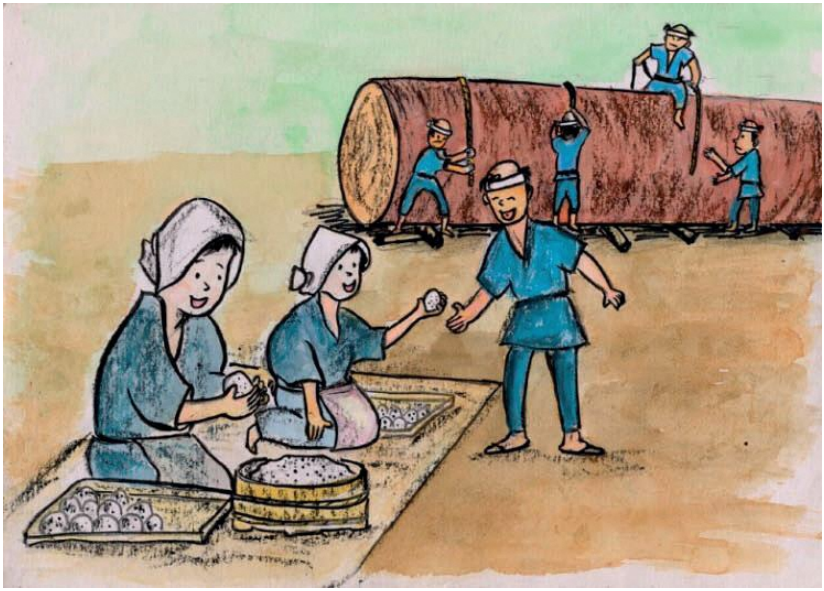
と相談を始めた。

「船で運ぶしかないやろ」

「ほんなら、美川の浜までは、縄(なわ)つけて引っぱらんなん」

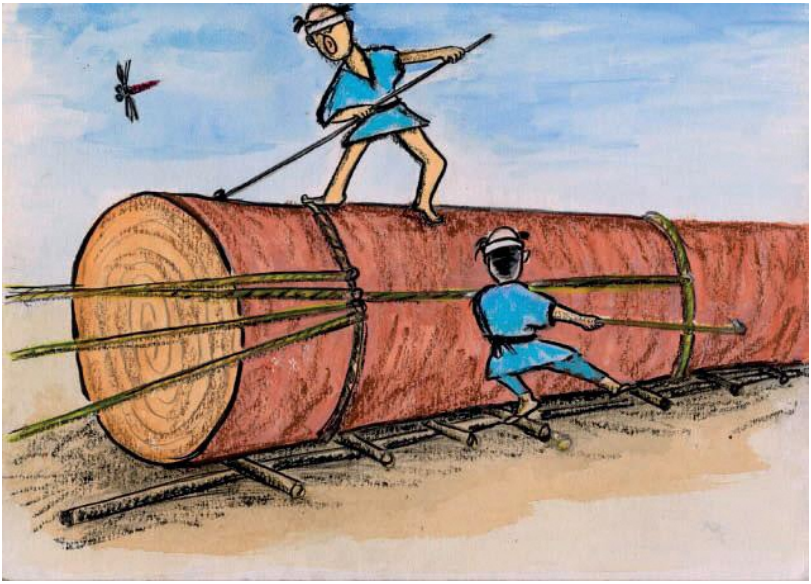
「皆ですりゃ、どうにかできるやろ」

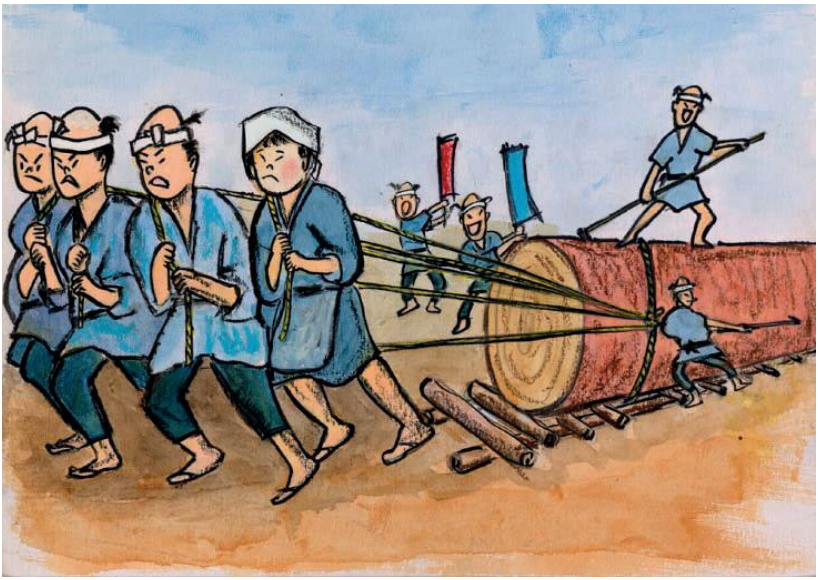
こうして、美川まで引っぱって行き、そこから船で運ぶことにした。



次の日、朝早くから鍋谷の村は大さわぎ。
木を切るだけで、たっぷり一日かかったのだから、遠い美川の浜まで行くのに、どのくらい、時間がかかるのだろうか。
それでも男たちは、木に縄をくくりつけ、女たちはおむすびを作ったりして、いよいよ木を動かすことになった。

まず、ヤッサイ、ヤッサイと音頭とりが、木の上で声をかける。
その声に合わせて、村中の男たちが木をひっぱる。





大きくかけ声をかけるもの、旗を振るもの、大木の下に丸い木を並べるもの、みんないっしょうけんめいがんばったが、それでもケヤキの木は、少ししか動かん。

隣の村からも、人々が、木を引こうとかけつけてくれた。

おむすびを作り終えた女たちも、縄を引く手伝いをした。

だんだん　だんだん、かけ声が大きくなり、どんどん、どんどん人が増えてくると、木はゆっくり、ゆっくりと動きはじめた。

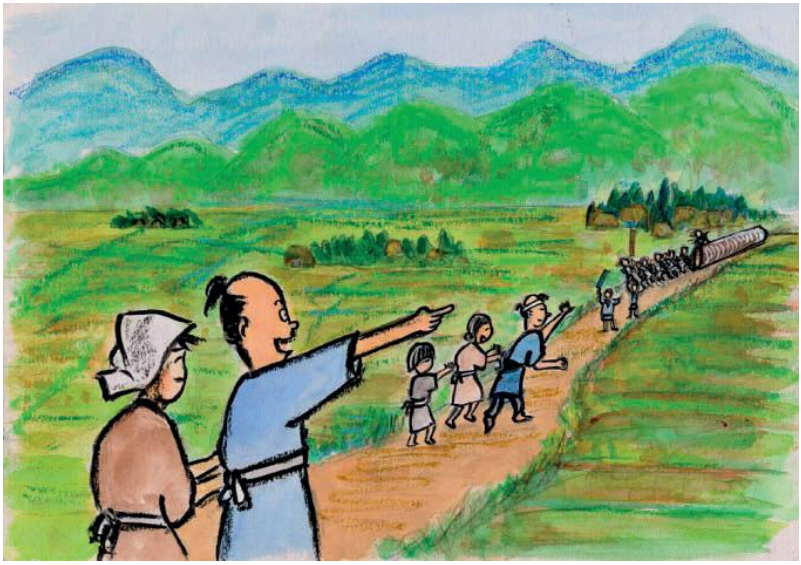
音頭とりに合わせたみんなの歌声は、隣の村にも、またその隣の村にも聞こえた。

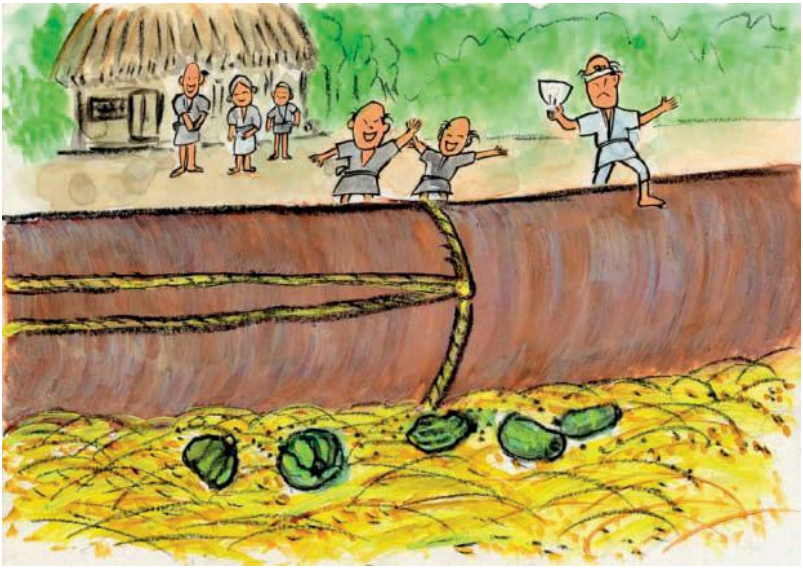
「本願寺さまのケヤキの木が来たぞ」

「お～、そうかー」

「お～、わしらも引っぱるぞー」

たくさんの人たちが、先を争うようにして家の中から出て来た。





ケヤキの大木は、たんぼの稲や畑の作物をなぎ倒したが、だれ一人、文句を言うものもなく、いっしょになって木を引っぱった。

鍋谷の村の人たちばかりでなく、隣の村の人たちも、いつの間にか、道筋の村々の人たちが、みんな、木を引いてくれた。

みんなで力を合わせた甲斐があって、やっと美川の浜までたどりついた。

「こんで、本願寺さんに立派な門ができるな」

「ほんとやなぁ。さあ、たんぼの稲の倒れたのを直すか」

「そうや、そうや、畑もいいがにせんなん」

そう言って、皆は　汗を拭きながら、楽しく笑い合ったとさ。

絵・後　泰夫